

(2) 私牧としての佐久穂町小山寺窪遺跡について

川崎 保

はじめに

中部横断自動車道の建設に伴って佐久穂町内の遺跡が発掘調査され、2020年3月に発掘調査報告書として公表されている（長野県埋文2020）。その中の一つ、小山寺窪遺跡は、寺院（津金寺）跡伝承地としても知られ、過去の発掘調査でも古代竪穴住居跡や中世五輪塔を含む墓群が検出されている（佐久町教委2002）。高速道地点の調査でも、古代から中世の遺構・遺物は検出されたものの、寺院の存在を直接うかがわせるようなものはなかったが、一方で、古代から中世にかかる遺構や遺物が検出されており、その当時の人間の活動が見られる。

発掘調査の段階では、検出された個々の遺構や遺物の年代や性格について、年報、現地説明会や速報展などで発掘成果に基づき公表されている上に、調査組織としての正式報告書が刊行された。さらに、将来的には遺物を含めた調査資料が移管された佐久穂町で研究や活用がなされるであろうが、個々の遺構や遺物の調査成果を見直し、遺跡としての性格を多少なりとも明らかにし、今後の地域研究や更には活用に益するよう、見解を簡単にまとめたい。

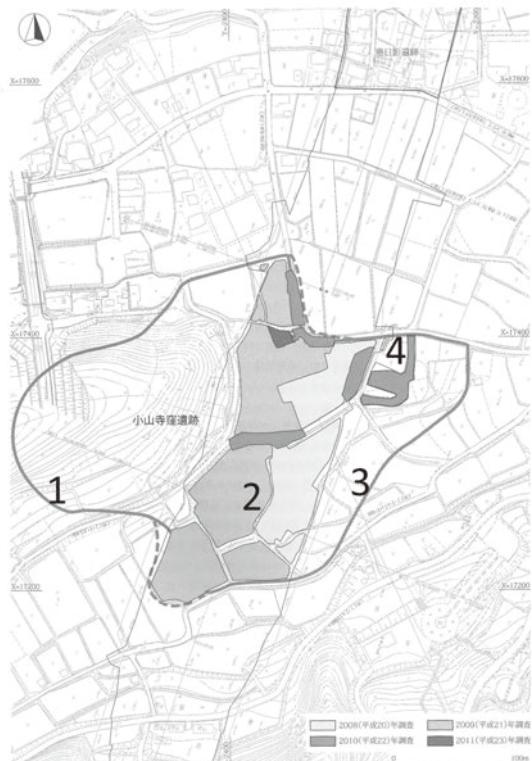
遺跡の概要

小山寺窪遺跡が所在する佐久穂町は北八ヶ岳から千曲川を横断して関東山地に接するように位置する。巨視的に見れば、北八ヶ岳山麓の東端と千曲川左岸の河岸段丘が接する地点にあり、微視的に見れば、八ヶ岳山麓の東端の低丘陵（小山）と、さらに同じく東西にのびる低丘陵との間に沢が流れる窪地（小山窪）に渡る遺跡である（佐久穂町2012a）。

この小山窪付近には、「津金寺」（三津金寺：立科町津金寺、山梨県北杜市津金山海岸寺と南佐久の津金寺）があったという伝承があり、南佐久の



第1図 小山寺窪遺跡の位置



第2図 小山寺窪遺跡の調査次と範囲

表1 小山寺窪遺跡発掘調査歴

次	年	調査主体	調査原因	文献
1	2000年（範囲確認） 2001年（本調査）	佐久町教委	農道整備	（佐久町教委2002）
2	2007年（試掘調査） 2008年～2011年（本調査）	長野県教委 長野県埋文	中部横断自動車道建設	（長野県埋文2020b）
3	2010年	佐久穂町教委	東電鉄塔新設	（佐久穂町教委2012a）
4	2010年	佐久穂町教委	町取付道路建設	（佐久穂町教委2012b）

津金寺は、平林山津金寺（現佐久穂町千手院）であるとも、再三移転したともいわれ、当地もその比定地の一つであったらしい（井出1998）。

今まで4次の発掘調査が行われている（表1・第2図）が、とくに、2001年の小山寺窪遺跡第1次発掘調査際には、推定で少なくとも100余基（多く見積もれば150余基）もの五輪塔を伴う中世の墓群が検出されている。調査範囲内では、寺院と想定できるような建物跡自体は検出されなかつたが、これだけの五輪塔を建造しつづける氏族の存在と合わせて、周辺に中世寺院の存在が期待されていた（佐久町教委2002）。

2007年には、中部横断自動車道建設に伴う長野県教育委員会の試掘調査によって本遺跡が丘陵上のみならず、窪地側にも広がることが確認された。よって、現在の中部自動車横断道佐久穂インターチェンジ用地内が調査することになった。2008年からの4か年、調査面積のべ22,180m²（第2図のトーン部分）、古代から近世にかけての竪穴建物跡・竪穴状遺構17軒、掘立柱建物跡13軒、土坑1059基、溝跡21条、杭・柵列1条、水田跡2か所が検出されている（長野県埋文2020）。ただし、寺院を想定させるような規模の建物跡は検出されなかった。

小山寺窪遺跡を区画する「大型溝」

古代から中世にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡や土坑群が検出されている。こうした古代から中世の遺構がある程度まとまって見つかること自体は、佐久盆地南部としては決して珍しいことではない。北東側に近接する佐久穂町奥日影遺跡では奈良時代（8世紀）の須恵器窯跡が検出されている（長野県埋文2020）。佐久市域でも尾根ば



第3図 溝跡 SD07

かりでなく、山あいの窪地状地形部分にも、古代から中世の遺跡が点在し、開発あるいは活用されていたことがわかる。中には平安時代後期の鍛冶関連遺構が見つかった洞源遺跡（2019a）や中世寺院跡が検出された地家遺跡（長野県埋文2019b）のようにある程度性格が特定できるものもある。無論、平野部と異なる山間地の開発に關係があることは立地から推測されるが、具体的に描きだすとなるとなかなか難しい（長野県埋文2020a）。

本遺跡でも第2次調査の2008年は窪地の小山沢沿いの低地を調査し、主に中近世の水田跡に伴う溝跡が認められた。さらに、2009年には、丘陵の最先端の尾根上を調査したところ、長いものでは90mを越える溝跡などが複数検出された（第2表）。このように小山寺窪遺跡では、遺跡の中を直線的な溝が横断ないし縦断していることに特徴がある。

小山寺窪遺跡で検出された溝は全部で21本（分岐したものをあわせて1本と数えれば20本）となる。遺物は、概ね、平安時代（9世紀）から室町時代（14ないし15世紀）までのものが含まれてい

表2 小山寺窟遺跡の主な古代から中世の大形の溝跡（第4図）

記号	長さ	幅	深さ	断面	等高線との関係	主な出土遺物
SD07	100	2	0.9	箱堀	斜行ないし平行	平安：土師器、黒色土器、須恵器、中世：内耳土器、古瀬戸、中津川等、埋土上層よりウマ下顎歯列4点
SD08	93	1.8	1.2	薺研堀	平行・直交	平安：土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器坏類等
SD09	77	1.6	0.5	薺研堀	斜行・平行（弧状）	平安：土師器、羽釜、中世：青磁碗
SD13	123	3.6	1.2	薺研堀	斜行・平行	平安：土師器甕、中世：内耳土器、青磁碗、常滑片口鉢
SD15	115	1.6	0.9	薺研堀	平行・斜行	平安：土師器甕、須恵器坏、中世：内耳土器、山茶碗、中津川甕・青磁碗、洪武・永楽錢等20点

長野県2020b を一部改変、溝の長さはいずれも検出された長さ。法量はすべてm。

る。本遺跡に限らないが、豈穴建物跡など人間が生活した痕跡に伴う遺構に比べ、溝から出土した遺物は少なくかつ年代幅を持つことが多いので、少ない遺物から年代を限定することは難しいが、概ね古代から中世に位置づけられている。

50m超の溝（以下「大型溝」）が5本（うち100m超が3本）、最大幅1m超のものが14本（うち2mを越えるものが4本）、最大深も0.5m超のものが5本（うち1m超のものが2本）もある。これだけの規模と年代幅を考えると一時期に形成されたというよりは遅くとも平安時代初期の9世紀から嘗々と築かれていて、鎌倉時代から室町時代にかけては、度々浚渫や補修を繰り返した。しかし、江戸時代以降の遺物が全く含まれていないことを見ると、近世にはその機能を終え、最終的に近代以降は埋没した状況になったと考えられる。

大型溝の事例

一見弥生や中世の溝跡かと思われるようなもので、古代に属した溝であった例があり、これらが牧と関連することが知られている（第5図）。

大型溝が牧に伴うことは、自体は想定されていた。発掘調査の事例ではないが、茨城県八千代町では50～300haの範囲を区画する溝、土壙の痕跡、製鉄遺跡（尾崎前山遺跡）が検出されており福田豊彦は古代の「牧」の存在を想定する（福田1981）。群馬県（前沢1991）や長野県（山口1990）でも牧比定地について同様な景観が想定されている。

区画する大型溝について発掘調査の成果からとくに言及したものとしては、群馬県安中市中野谷地区の事例がある。同地域では、奈良・平安時代

の大規模な溝による区画が検出されている（中原遺跡、下塚田遺跡、下宿東遺跡、細田遺跡、注連引原Ⅱ遺跡）。中でも注連引原Ⅱ遺跡では、箱薺研状（底部が平坦で途中まで箱型だが上半は漏斗状に開く断面形）で、上幅1.5～3.0m、下幅0.7～1.3m、深さ0.7～1.3mをはかる大型溝が検出されている（安中市教委1988）。注連引原Ⅱ遺跡では当初弥生土器がまとまって出土したことから、弥生時代の環濠とも想定されたが、大工原豊によれば、当該遺跡周辺の中野谷地区では、100ha以上にも及ぶ範囲に8世紀から9世紀にかけて構築された区画する「大型溝」跡が検出されているだけでなく、狩り込み（野馬追い）用の施設、馬具などを生産する各種工房や鍛冶施設、管理用の建物といった遺構や水場などが想定できることから、これらの大型溝は放牧用の各種区画施設（大溝・土壙・柵）に相当するものであり、「牧」に関連するものと考える（大工原1994）。

この他、群馬県では、安中市中野谷地区以外でも、渋川市半田中原南原遺跡でも大型の区画溝が検出されており、牧にかわわる遺構（以下、牧関連遺構等と略す）と認識されている（高島2008）。

山梨県でも、北杜市梅之木遺跡で3歳ぐらいの仔馬の骨および焼きごてが検出された。同地は上皇の私牧（御院牧）「小笠原牧」比定地の中にあることから牧との関連が注目され、その後、周辺の寺前遺跡からは馬装の鈴、上原遺跡からは轡、浅尾原Ⅳ遺跡からはこれらの鉄製品を製作可能な鍛冶工房群と炭焼き窯が検出されただけでなく、とくに永井原Ⅴ遺跡では、検出された全長約700m、幅1m、深さ0.5mで、U字形部分が多いが、

注連引原Ⅱ遺跡同様の箱薬研状の断面形も見られる（明野村教委2004）。佐野隆はこれらを総合的に把握して、前述の小笠原牧に関連する施設と理解する（佐野2008・2014）。

東京都でも多磨（多摩）地域で、9・10世紀に遡る可能性がある区画溝が検出されている。町田市木曾森野遺跡では東西300m、南北200m以上の2条の溝で、断面V字（薬研堀）状で最大幅1.8m、深さ1mのものを含み、日の出町三吉野遺跡群でも長さ200mで方形に区画でやはり断面はV字で、幅1.2~1.8m、深さ0.5~0.7mであるという（松崎2008）。

これらの区画溝が長大であるだけでなく、周囲から牧に関連する遺構・遺物が検出されていることもこれら大型溝を牧関連遺構とする根拠となっている。

地域史研究から見た佐久穂町周辺の私牧

信濃国に官牧（十六牧）が存在し、うち佐久には、望月、長倉、塩野牧がおかれ、さらにその周辺には在地の武士団が管理・経営する私牧がいくつもあったとされる。中でも南佐久の茂来山麓、千曲川右岸の抜井川南岸には、馬場、駒寄、牧沢（楯氏関連）、野馬除、馬洗の池、下馬瀬口（矢田氏関連）といった牧に関連するとされる地名や城館跡（楯六郎館跡、大崖城遺跡）が存在しているが、井出正義は、これらは佐久武士団の楯氏（六郎親忠）と矢田氏（義清）の拠点であり、当地に彼らが経営する私牧があったと推定する（井出1998・2004）。

とくに、抜井川南岸（左岸）の楨（牧）沢川との合流点近くに存在する後平（うしろだいら）遺跡からは、やはり長さ100m以上もある、上端幅3~4m、底幅0.5~0.7m、深さ1.4~1.6mの野馬除状遺構（溝跡）が検出されている。同遺構からは遺物は極めて少ないが、周辺の遺構から銜（くつわ）状鉄製品などの鉄製品が出土していることから、発掘調査担当者は、千曲川右岸に在地武士団が経営したと考える私牧が存在したことから、この事例についても、私牧関連遺構（野馬除け）

と想定している（佐久町教委1987）。

「ウマ」にかかわる遺構・遺物

すでに述べたように古代から中世にかけて牧関連遺跡からは、大型溝が検出され、とくに古代末には断面箱型や薬研堀のものも出現していることがわかる。

また、小山寺窪遺跡には、大型溝以外に、以下のウマ（やその文化）にかかわると考えられる遺構・遺物が存在する。

溝跡出土のウマの歯

まず、ウマそのものの一部である歯が溝跡SD07の埋土上層から下顎歯列4点が出土している。溝SD07は主に下層から平安時代前期の9世紀の土器がまとまって出土しているので、溝の開削は古代に遡るが、上層からは中世の遺物も出土している。ウマの歯も古代から中世にかけて、この溝にウマの歯が廃棄されるような状況があったことがうかがえる。

馬屋状遺構

調査範囲の南西側に古代から中世に属すると思われる建物跡群が見つかっている。中でも掘立柱建物SB14付近は、掘立柱建物跡、竪穴建物跡（の一部の溝）、小竪穴が集中、重複していてわかりにくかったが、長方形の小竪穴と溝をともなう掘立柱建物が検出されている（第6図）。調査段階では、複数の遺構が時間差を持って造成、廃棄されて重複されたことも考えたが、土層観察から切り合いは確認できず、掘立柱建物跡に小竪穴、溝がともなっている可能性が高いと考える。こうした小竪穴や溝を伴う掘立柱建物跡は、中世遺跡でいくつか類例が知られていて、馬屋状遺構との類似する（曳地2010）。

木製人形

筆者が馬屋状遺構と考えるSB14の西側のやや低い段には、建物跡とは思われない小土坑群が展開するが、その一つ小土坑SK1074から木製人

形4点が出土した（第7図）。4点は二群に分かれ、前者の1・2は2か所を抉り、被りものと推測する部分と顔部・頸部・胴部を表現する。被りもの上部は山形状を呈し、裏面は被りものから頭部にかけて斜めに削る。長さは1が16.3cm、2が15.4cm。後者の3・4は1か所を抉り、顔部・頸部・胴部を表現するが、被り物の表現はない。長さは3が14.1cm、4が14.7cmを測る。前者に被りもの表現があつてやや大形であることから、男性、後者は被りもの表現がなく、小形であることから女性と推測されている。山田昌久によれば、布着せ人形の可能性が高いと指摘されている（長野県埋文2020b、109頁注）。同土坑からは木製品以外の遺物が出土しておらず、木製品自体の炭素年代などの理化学的な年代測定も行われていないが、周辺の土坑群からは中世の陶磁器が出土している。

布着せ人形といえば、岩手県など東北地方に見られる「おしらさま」が有名である。おしらさまは、農業や蚕の神以外に『遠野物語』でも紹介される「馬娘婚姻譚」に象徴される馬の神としても知られる（柳田1910）。ウマそのものではないが、馬文化に関わる遺物として解釈したい。

まとめ

平安時代の遺物しか出土しない溝の断面形はいずれもU字状、一方で、古代だけでなく中世遺物を含む「大型溝」のそれは薬研堀形（V字）あるいは箱形である。溝の断面形だけで遺構を編年することは、そもそも難しいが、今のところ古代（平安時代前期？）に開発され、その後中世にも使いつづけられ、近世以前に廃絶したものが薬研堀状を呈していると考える。

こうした中世の薬研堀状の溝に少なからず平安時代の遺物が含まれることは、中世の開発時に古代建物跡などを破壊した際に混入したというよりは、古代にすでに存在していた溝を度々浚渫や補修を繰り返したためと筆者は考える。ただし、厳密には二つのシナリオが考えられる。①古代の開発が、中世に引き継ぎ行われた。つまり、古代の

開発者と中世の運営者が同一系列の集団である。

②一方、古代の開発と中世の開発はそれぞれ別で、つまり一旦土地利用に断絶があり、中世の開発時に、古代の遺構（例えば、建物跡やU字状の小型の溝など）を壊したため、中世の遺構に、古代の遺物が含まれていることとなった。古代の開発者と中世の運営者は全く別の集団である可能性もある。

遺構形成のプロセスにおける仮説については、さておき、古代開発者と中世運営者に連続性はないという②のケースであったとしても、遺構としての「大型溝」の起源が古代にあることは注目に値する。

すでに述べたように佐久穂町においても、千曲川の対岸に私牧比定地がある。これらはあくまで伝承の範囲で、考古学的な実証は十分ではないが、在地の武士によって経営されていた可能性がある。

山梨県の事例のような領主が上皇（院）のような大規模な私牧であれば、中央（京都や鎌倉）で編纂された文献資料にも名称が出てくるのだろうが、在地の国人クラスが経営したであろう私牧の経営主体が誰かとなると、なかなか難しい。

筆者も、発掘調査のごく初期には寺院跡が見つかるのを期待していたが、延々と続く溝は、寺院関連施設ではないことは容易に推測できた。しかし、ではどのような性格の遺構なのかという根本的な疑問に調査段階では、なかなか回答できなかつたことは忸怩たる思いが今もある。遺跡の北側の緩い尾根の等高線に並行する大溝跡が検出され、それが用水路ではないことには気がついたが、その用途については調査時から課題であった。ここでは牧とくに私牧にかかる施設であるとの見解を提示する。

一方、いわゆる牧関連遺跡では、牧を経営するために必要な金属加工関連の遺構や遺物が見られるが、本遺跡では顕著ではない。ウマの歯や馬屋状遺構はともかく木製人形にいたっては牧を示す遺物とまでは言えないかもしれない。

しかし、用途や機能不明の大形溝があったとい

うだけでなく、これを地域史研究に還元するための試案である。諸賢の叱正を待つ。

謝辞

発掘調査時の基礎的な整理を済ませ後任に引き継ぎ、報告書をまとめる機会に恵まれなかつたので、調査担当者としての所見をペーパーで公表できる場がなかなかなかつた。とくに、遺跡調査時には、発掘作業員の皆さんやセンター同僚諸氏はもとよりとくに地元の井出正義、島田恵子、小林範昭、加藤郁雄、曳地隆元の諸氏・諸先生からはとくに多大なる学恩をいただいた。改めて感謝申し上げる。

引用参考文献

- 安中市教育委員会 1988『注連引原（II）遺跡—すみれヶ丘公園造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 井出正義 1998「奈良・平安時代」『南佐久郡誌』長野県南佐久郡誌刊行会
- 井出正義 2004「佐久町の私牧」『佐久町誌歴史編一原始・古代・中世』佐久町誌刊行会
- 佐久町教育委員会 1987『後平遺跡 縄文早期後半から前期初頭における落とし穴を伴なった集落の調査』
- 佐久町教育委員会 2002『小山寺窪遺跡 伝承の寺跡および鎌倉時代～室町時代の墓群の調査』
- 佐久穂町教育委員会 2012a『小山寺窪遺跡（I）—東京電力鉄塔新設地点の発掘調査報告書—』
- 佐久穂町教育委員会 2012b『小山寺窪遺跡（II）—中部横断自動車道町取付道路地点の発掘調査報告書—』
- 佐野 隆 2008「小笠原牧の考古学」『牧の考古学』古志書院
- 佐野 隆 2014「発掘された平安時代の牧」『甲斐の黒駒—歴史を動かした馬たち—』
- 大工原 豊 1994「奈良・平安時代の「牧」と推定される遺構群について」『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
- 高島英之 2008「上野国の牧」『牧の考古学』古志書院
- 長野県埋蔵文化財センター 2019a『小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳 尾垂遺跡 尾垂古墳 洞源遺跡 荒城跡 月明沢岩陰遺跡群—佐久市内7—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書122
- 長野県埋蔵文化財センター 2019b『滝ノ沢遺跡 寺久保遺跡 庚申塚 台ヶ坂遺跡 上滝・中滝・下滝遺跡 和田遺跡 和田1号塚 滝遺跡 家浦遺跡 田島塚 水堀塚—佐久市その9—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書124

長野県埋蔵文化財センター 2020a『地家遺跡 兜山遺跡 兜山古墳 大沢屋敷遺跡 前の久保遺跡 三枚平B遺跡—佐久市8—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書123

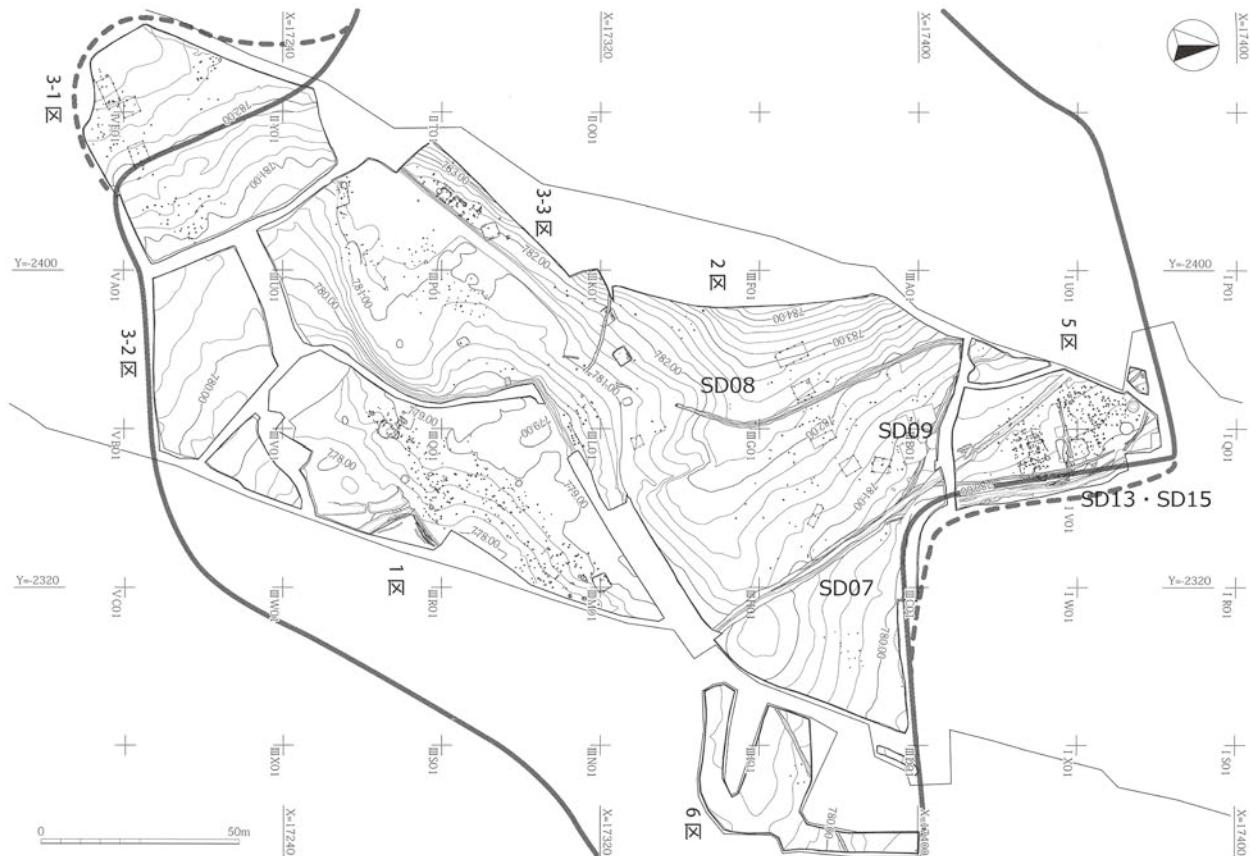
長野県埋蔵文化財センター 2020b『奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 上野月夜原遺跡 満り久保遺跡 馬越下遺跡—佐久穂町内—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書125

長野県南佐久郡誌刊行会 1998『南佐久郡誌 考古編』曳地隆元 2010「中世における馬屋状遺構について」『信濃』62-11

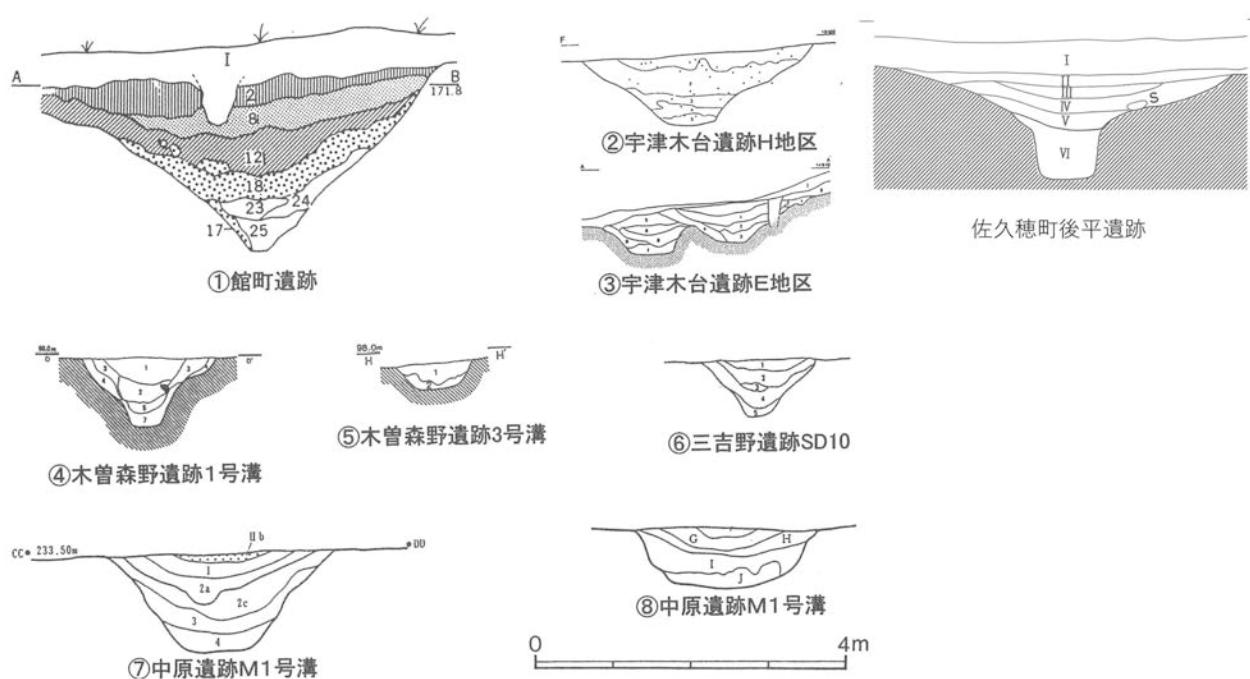
福田豊彦 1981『平将門の乱』岩波書店
前沢和之 1991「上野国の馬と牧」『群馬県史 通史編2』群馬県史編さん委員会
松崎元樹 2008「武藏国多磨郡域の牧をさぐる」『牧の考古学』古志書院
柳田國男 1910『遠野物語』聚錦堂
山口英男 1990「信濃の牧」『長野県史通史編第一巻原始・古代』長野県

図の出典

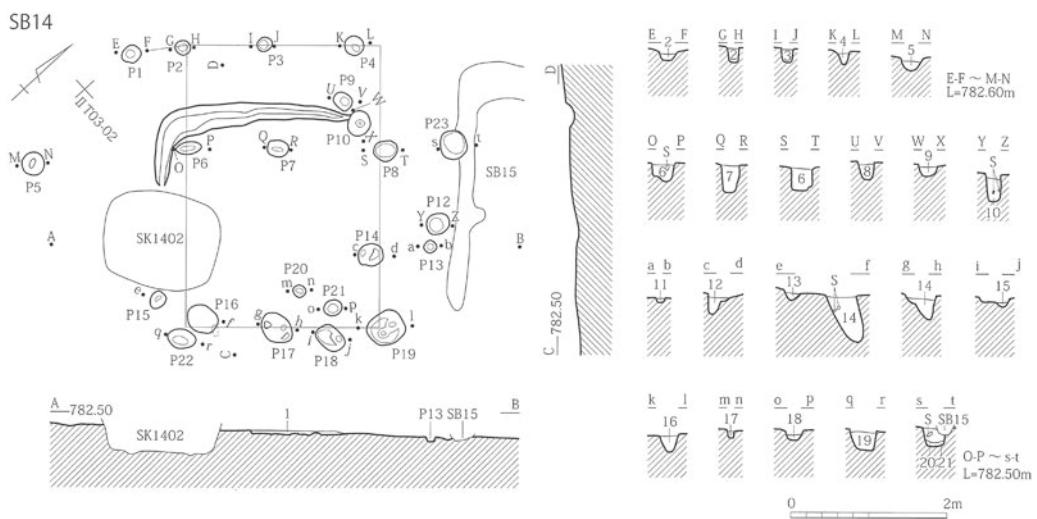
- 第1・4・6・7図 長野県埋文2020b
第2図 長野県埋文2020bに一部加筆
第3図 佐久穂町教育委員会提供
第5図 松崎2008、後平遺跡のみ佐久町教委1987



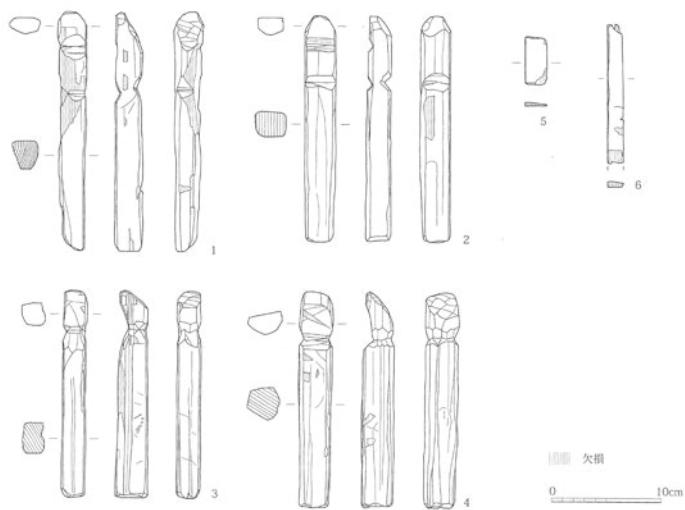
第4図 小山寺窟遺跡の大型溝平面図



第5図 牧関連遺跡の大型溝の断面



第6図 馬屋状遺構



第7図 木製人形